

豊かな想像力で編む物語

今年も大勢の方の応募作を楽しく拝見させていただいた。絵本のたった一場面の絵から、その状況を感じ取り、想像力を交えて豊かな物語を三百字でつくる。絵自体は昭和時代の昔のさし絵だが、そこから組み立てる物語に時代的しぼりはない。最小の結びつきを起点に、子どもも大人も自由に物語を編んでいただきたい。

まずは、一般の部から。大賞は長根りんこさんの「橙色の鳥」に決まった。主人公（おばあちゃん）が孫娘に昔話をしている。登場するのは青い鳥ならぬ橙色の鳥。その小鳥は「金色の花」が咲く木を教えてくれたほかに、さまざまな世界を教えてくれた大事な心の友。そして十数年後、たぶん作者の思春期の頃に、金色の森に誘ってくれる。そこには、すてきな青年が立っていた。「そう、あなたのおじいさんよ」。出来過ぎたような金色の恋だが、こんな豊かな恋の話は孫娘の心に他の物語よりも深く残りそう。また、準大賞には鈴木一華さんの「一步」が入った。主人公の二人はジェンダーから自由になることを選ぶことによって、「本当の姿」を得られたと物語を展開する。短文の中で手際よく現代の主題の一つを捌いた。その他、「キツネの姉妹、旅に出る。」（奥谷和樹）、「言の葉の舞」（清羅）、「誕生日」（スギサトリキ）は、各選者の推薦により入選作になった。

一方、小中学生の部では、野本一希さん（小二）の「そらのうみ」が大賞を得た。赤い実を食べると空に浮かび、まわりにはたくさんのさかなたちが背比べをしている。ザトウクジラが虹をつくると、さかなたちは七色のどの色にとどくかで背のたかさを比べあった。いちばん背が高かったのはジンベエザメ。虹の七色にいろどられながらの想像力ゆたかなメルヘンだった。準大賞は鈴木葵さん（小五）の「小鳥の声」に決まった。一色委員が推されたように、絵から発想された自然な少女の気持ちががていねいに大切に描かれていて、心がなごむ。その他、各選考委員推薦の入選作は「未来から来た鳥」（横道玄：中二）、「からかさおぼけ」（森琴羽：小一）、「行き先」（小松崎瑛人：中二）、「子供の世界」（後藤優雅：中三）。今回は小学生低学年の作品の入賞が多かったのがうれしかった。私自身は「子供の世界」を推したが、いまふうの「かわいい」の力を「かわいい散髪屋」「かわいい劇」へと展開していく流れに、子供の世界の物語力が自由に働いていて楽しく読ませていただいた。

子どもは誰もが詩人で物語の創作者

今年も古河文学館主催の「1ページの絵本」に全国各地から数多くの応募があり、ひとつひとつの作品を楽しみながら読ませていただきました。

一枚の絵を見て、そこから詩や物語を創作するというのが本企画の趣旨ですが、人間は言語を操ることができるようになって以来、太古の時代からさまざまな思いを言葉に重ね合わせて詩や物語を創作して来たように思います。単に目の前にある事柄を描写したり、説明したりするのではなく、イマジネーションにより詩や物語を創作するということは、自分で感じたことや考えたことを他者と共有するためだといえるのではないのでしょうか。そうした点でも、この「1ページの絵本」は、人間にとっての詩や物語を創作することの大切さというものを改めて教えてくれます。

一般の部大賞を受賞した長根りんこさんの「橙色の鳥」という作品では、橙色の小鳥と金色の実という色彩の対比によってビジュアルなイメージが広がるだけでなく、十数年後という時間の経過が違和感なく表現されています。一般の部準大賞の鈴木一華さんの作品「一步」では、多様な生き方というものを文章の中に織り込んでいます。

小中学生の部大賞を受賞した、野本一希さんの作品「そらのうみ」は、赤い実を食べてふわふわと軽くなり、大空に上っていき、空の上で泳ぐ魚たちに出会うというファンタジー世界が陸と空と海という空間を超えて広がっていきます。同じく小中学生の部準大賞の鈴木葵さんの「小鳥の声」という作品からは、少女が走り出す様子など動きのある姿がいきいきと伝わってきます。

大賞を受賞した小学二年生の野本さんだけではなく、小学校低学年の作品の中には自由な発想に基づいた素敵な作品が数多くありました。スペインの画家パブロ・ピカソの言葉に「子どもは誰もがアーティスト。しかし、問題は大人になってもアーティストでいられるかどうかである」というものがありますが、このことは詩的表現や物語創作においても当てはまるように思います。「子どもは誰もが詩人で物語の創作者」といえるかもしれません。

これからも「1ページの絵本」に対しての関心がより高まり、この企画がますます発展していくことを願っています。

作り出す力

一枚の絵からいろいろなイメージを膨らませて物語を作る。イメージは自由に世界を飛び回る。たとえば自分自身の願望や、将来の世界を予想したものだったりするが、それでも、今という時代を的確にとらえているようだ。

鳥と話をしたい願望、生まれる前の世界、旅への夢、狐に託した変身願望もあるかもしれない。ジェンダーやSDGs、戦争も。今年もいろいろな世界が展開した。

一般の部の大賞「橙色の鳥」、一つだけの金色の実はとてもロマンチック。「一步」はジェンダーの問題。ともすると真剣なあまり暗くなってしまいそうなところを、爽やかにさらりと描いている。カノジョ、ボクがカタカナ表記なのも意識的にしたもの。「言の葉の舞」はリフレインを多用した詩。少し纏まり過ぎた感はあるものの、新鮮だった。「丸くなれない世界で」は、「僕の手は人を殺すためじゃなく、君の手を引くためにある」というフレーズに現実感がある。

小中学生の部の「そらのうみ」は、空と海が逆転する大胆な発想。しかもそこに登場する魚たちがユニーク。いかにも背比べをしそうな魚たち。しかも虹が背比べの基準になっている。これが小学二年生の作だというのに驚く。「からかさおぼけ」は小学一年生。からかさが懸命に飛ぼうとしているのを冷静に見ている「わたし」だが、夢を叶えたからかさに「耀いてみえた」と称賛するところがいい。他にも小学一年生がいる。「ないしょのともだち」は、内緒の友達である鳥がいろいろなことを教えてくれる。教えるといっても知識ではなく、近所の出来事なのだが、ユニークな物語に出来上がっている。ご近所の話聞くために毎日鳥に会いに行くわくわく感。「またあいたいな」は自分のことのように。鳥と話がしたいけど家に帰らなければならない。後ろ髪をひかれて後ろ歩きをしていたら転んでしまったので前向きに歩く。鳥との別れがリズミカルに描かれている。「わくわくがいっぱい」、父親に会いに行く姉妹の話。いっぱい話したいことがある。「あこがれのことりちゃん」、鳥の尻っぽの美しさに魅せられて自分も尻っぽが欲しいと思う女の子。「ふしぎなトランク」は小学二年生。この魔法のトランクはどの時代へもタイムスリップし何処へでも行ける。昔に戻って地球温暖化を何とかしようとする。

小学校低学年でもこれだけユニークな物語を紡ぎだせることに驚く。学校の勉強は受け身が多いが、能動的に作り出す力を養うことは、これからの人生を豊かなものにするに違いない。

見つめ合う 語り合う 先に

昨年講評で、高校生の声を聴きたい、未来を想像してほしいといいましたが、今回は、高校生の作品が2点選ばれました。

「丸くならない世界で」「僕の手は、人を殺すためじゃなく、君の手をひくためにある。僕の足は、土地を奪うためでなく、君と旅するためにある」なんというやわらかい、力強い宣言でしょう。今ある危うい世界の動きに目を向けて、愛をこめたことばがあります。未来を見つめる力に感動しました。

「友達」窓の外に友達が一人見送ってくれています。友達なんか別れてしまえばおしまいと寂しかったのに、どんなにかうれしく驚いたことでしょう。さよならのことばは窓越しだったけれども、二度とない若い日の、ことば以上の気持ちが通い合っています。

今回の候補絵は、どちらもたがいに向き合っている絵です。じっと絵を見てみると、ことばが聞こえてくるようです。今、誰かと交わしたいことばが、会話が、たくさんの応募作の中に飛び交っていました。そんな中で会話の中身ではなく、言の葉という交わされることばというものに注目した作品があります。

「言の葉の舞」「咲くのも 散るのも 植えるのも 言の葉 ひらひら わたしの口から」なにげなく口から飛び出していることばが、人を幸せにもし、悲しませもするのだと、はっと気づかされました。

「小鳥の声」も、会話ではなく、会話をする前の小鳥に会いに行く心躍りを表現しています。走っていく様子が具体的な動きで伝わってきます。ぬげそうなげた、髪の毛を耳にかけてと、細部にこめた表現に、いっしょに走っていきたくなりました。

低学年のまっすぐなキラキラした輝きに出会うと、しみじみうれしい。

「あこがれのことりちゃん」しっぽにあこがれて、かさで、しっぽの真似をする。きのみも食べてみようかと思うけど、「しっぽだけでもうじゅうぶん」というラストがいいです。「またあいたいな」「ずっと小鳥を見ていたいから後ろ向きで帰ろう」いいアイデアでしたが、転んでしまって、また前向きで。

読んでもらうことができませんでしたが「小鳥とお嫁さん」今日、初めて会った、小鳥の声に似ているいとお嫁さんにも、見せたいと思います。「かさ」水族館に行きたくなかったのに、かさで、しゃちの水しぶきを防げると聞くと、とたんにかけて出ていく。

素敵な応募作を、もっと紹介したい思いでいっぱいです。

きらりと光る一行をめざそう

応募総数を見れば、一次選考を潜り抜けることだけでも大変なこと。絵の説明のみはNG、離れすぎても達成できない、この難しさに挑戦された皆さんに敬意を表します。しかしながら文章力と発想力が決め手になってくることは否めません。日ごろから空想を拡げることや、スマホメール以外に短文でいいから想いを綴る訓練が快作につながるでしょう。よって、似た作品でもきらりと光る一行や発想があれば評価する意図で二次選考に臨みました。個性の表出とは、たった一行で際立つものです。優劣を決めるのは、広く読まれた結果の、読者の感性によるもの。入賞にもれた方も気持ち新たに、来年度もお待ちしております。

小中学生の部大賞、野本一希さんの「そらのうみ」は課題絵の空に背比べする魚たちが虹に到達する想像性にくわえ、固定概念を破るピンク色の虹に目を見張りました。観察力と図鑑愛読による生き物へのこだわりが秀作を生んだと言えましょう。物語の力で絵の外に連れ出してくれる稀なる体験をありがとう。横道玄さんの「未来から来た鳥」。類するタイムスリップ設定を鳥の視点で展開し、籠の外を飛ぶ自由さを下駄の足指になぞらえ、読者の五感を震わせる新鮮さ。小松崎瑛人さんの「行き先」の結末は双子の誕生。語り手と行き先が同じ子という伏線がよく練られていました。なお特筆に値する小学一年の濱田莉杏さん、落合結斗さん、くめやはづきさんの純真無垢な作品に揺さぶられ、この萌芽を大切に育まれるよう願っています。

一般の部大賞、長根りんこさんの「橙色の鳥」は、祖母が孫に語る構想の中に一個の金色の実と花、そして魔法の小鳥の構成が巧みでした。その一方で、予定調和的な閉じ方とも取れましたが、この部分に誘導するための前段であり、周到に練られた結果だったように思われます。また現況取り上げられるトランスジェンダーを物語に仕込んだ鈴木一華さんの「一步」は、言葉の力を借りて想いを超える体現として、題名に集約させた点が見事です。日本文理大付属高校の木許梗さん「友達」では似たような着想が多かった中、最後の三行の向日性に等身大の作者が社会に飛び出してゆく暗示がありました。同校他、毎年多くの学校から作品が寄せられ、先生方の熱意に感謝します。詩人団体は各県にあり、いつか詩作の機会に結びつきますように。